

## 日本国際賞受賞者サー・ジョン・ホートンを囲む学術懇談会\*

廣 田 勇\*\*

すでに「天気」53巻第2号の情報ファイルでお伝えしたように、2006年日本国際賞受賞者に英国のサー・ジョン・ホートン博士(第1図)が選ばれました。この日本国際賞は国際科学技術財団が毎年2つの分野を定めて顕著な業績を顕彰するもので、ホートン博士は地球環境変動部門で「衛星観測による大気構造・組成の先駆的研究並びに気候変動アセスメントへの国際的取組みにおける貢献」により受賞されました。

ホートン博士は1960年代からOxford大学で大気赤外放射理論の確立とそれに基づくニンバスシリーズ衛星による成層圏中間圏の全球長期間連続観測を行ない中層大気科学の先駆的研究を成し遂げられた方です。彼のテキスト“The Physics of Atmospheres”(邦訳:「大気物理学」)を学ばれた方も多いことでしょう。

さらに1980年代末からはIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の第一作業部会議長として大気科学者の立場から地球環境問題の国際的リーダーシップを発揮されてきました。

今回、授賞式前日の4月19日に受賞記念講演会に引き続き標記の学術懇談会が開かれました。この懇談会は財団より指名された地球環境変動部会長の廣田勇が座長をつとめ、部会委員(註)が推薦した関連分野の第一線研究者9名が参加しました。

受賞記念講演は地球温暖化問題など一般向けの内容でしたが、懇談会はAcademic Discussionの趣旨に則して大気科学そのものに焦点を合わせ、わが国の研究の現状を紹介するとともに、今後の諸問題をホートン博士と一緒に議論することに主眼が置かれました。

参加者は、廣岡俊彦(九州大学)、林田佐智子(奈良

女子大学)、中島英彰(国立環境研究所)、小池 真(東京大学)、竹川暢之(東京大学)、岡本 創(東北大学)、早坂忠裕(総合地球環境学研究所)、江守正多(国立環境研究所)、高橋正明(東京大学)の各氏で、衛星観測に基づく成層圏対流圏の力学・組成の解析、国産衛星ADEOSによる極域オゾン層観測、エアロゾル等の化学過程と輸送、雲レーダーとライダーによる雲と組成



第1図 学術懇談会におけるサー・ホートン。



第2図 参加者との討論場面。

\* Academic discussion meeting with Sir John Houghton, the laureate of 2006 Japan Prize.

\*\* Isamu HIROTA.

© 2006 日本気象学会

の観測，大気組成分布による放射過程の変動，大循環モデル (GCM) による気候変動数値実験，等々について議論が行なわれ，これらに対し，ホートン博士から逐一専門的な質問・コメントが寄せられました。総括的に，日本のこの分野の研究レベルが国際的に見ても非常に高いことを正しく評価していただいたことは，参加者周辺のより若い世代の人々に大きな励ましを与えてくれます。

懇談会の後半では，部会メンバーも交えた自由討論を行ない，地球環境変動に関し，将来の諸問題や研究

のあり方などについて活発な意見交換が行なわれました(第2図)。当初の予定時間2時間を20分も超過するほど熱の籠った議論で，初期ニッパ衛星観測から40年近くも経った現在なお，大気科学研究の内容そのものに深い理解と強い情熱を持ち続けている博士に参加者一同感銘を受けた有意義な学術懇談会でした。

(註) 参加部会委員 (敬称略)

木村龍治，近藤 豊，笹野泰弘，中澤高清，中島映至。